吉川英治

新平家物語

第八卷

火の國の巻

昭和二十七年十月十五日 印刷
昭和二十七年十月二十日 發行

定價 二八〇圓

新・平家物語 第八卷 火乃國の卷

著作者 吉川英治

發行者 杉山胤太郎

印刷所 東京都新宿區市ケ谷加賀町
大日本印刷株式會社

發行所 東京都丸ノ内
大阪市中之島
小倉市砂津
朝日新聞社

火乃國の巻　目次

初暦・治承元年　三
鉈　一一
賴朝のほくろ　一九
政子　三一
蟲の垂衣　四六
市に出た馬　五七
初對面　六七
佐佐木兄弟　八二

龜の前　九一
雲は遊んでゐる　九八
あねいもと　一〇九
男親　一一九
彼女の處理　一三四
冬山は燃えやすい　一四九
火の國の花嫁　一六〇
夜の富士　一七二
いつくしまの内侍　一八五
雪の御所　一九六
山門猿　二〇九
土下座陣　二一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「方丈記」斷片　二二七
菖蒲葺き　二三二
虎口　二四五
座主流し　二五七
怒め坊　二六八
辨慶下山記　二八二
人里　二九四
百面相　三〇五
鬼若童子　三一六

火乃國の卷

初暦・治承元年

三島菅笠は、古くからこの地方の産物であつた。「笠縫ひ」と呼ばれて、驛路の道ばたなどで、よく、からかはれたりしてゐる農家の乙女たちが見られる。彼女たちが、雨の日や冬の夜に作り蓄めた菅笠を持ち出しては、海道の商戸や旅人の間を賣り販ぐところから、伊豆女、伊豆石などと共に名がたかい。

その伊豆の國、三島の宿驛には、もうひとつ世に聞えてゐるものがある。年の始めに配られる三島暦だ。その頃、東八ケ國でつかはれる暦は、武藏大宮と、こゝの三島神社と、二所の暦ノ宮で編纂され、國々の府官から武門や庶民の手へ頒たれてゐた。

ことしも、安元三年（この年八月、治承元年と改元）の初暦が出た。

いづれ版木の技術も暦算の法も、宋大陸からの移入に違ひなく、粗朴な刷物ではあつたらう。しかし、三島明神から國司の廳へ、毎年の例によつて納入される數は少いものではない。——國

廳の曆所の隅には、なほ、うづたかく、その殘部が積まれてあつた。

『あるではないか。こんなに』

伊豆の冠者有綱は、それを指さして、ひとりの廳の吏生を罵つてゐた。

『なぜ、隱すか。おれが求めれば、無い無いとばかり申して』

『いえ、いえ。それはまだ行き渡つてをらぬ郡家とか、鄕長などへ頒ける物なので』

『だから、おれが年賀めぐりの途々、北條殿や狩野介殿へも、屆けてやると申すのに』

『それが』

『それが、何だ。なぜ拒む』

『いかに、仰せられましても』

『よいから出せ。一束でも、ふた束でも』

『その、なほ、思し召のほどを、よく伺つてみませぬ事には』

『たれの思し召を。……はゝあ、父の仲綱殿が、おれには、渡すなとでも云つたのか』

『弱りましたな。どうも』

『よし〳〵。渡し難ければ、盜まれたと云へ。有綱が强奪して參りましたと、申し上げておけばよい』

理由を知ると、彼は笑つた。繩からげの束を二つ、兩手に提げて、國廳の横から出て行つた。伊豆守仲綱の私邸は、この官衙の門から歩いても、いくらもない所にあつた。塔の森をへだてて、三島明神の社殿も近い。すべてこの邊一帶は、國分寺時代からの古い國府の地であつた。

『おい、これを、鞍に付けておけ。おれも身支度してくる』

厩仲間に、荷をあづけ、有綱は奥へはいつた。

正月もまだ松の内である。どこを訪ふにせよ、烏帽子や直垂は見苦しくなく、と云ふつもりであらう、洒落めかして、やがて中門の駒つなぎへ、戻つて來た。

すると、外出してゐた父の仲綱が、いつのまにか、歸つて來てゐる。小者をつかまへて、何やら問ひたゞしてゐるふうなのだ。「これはまづい」と、有綱は舌打ちした。二の足ふんで、默然と、頭を下げた。

『有綱。出かけるのか、どこぞへ』

『はつ。正月でもありますゆゑ』

『行くはよいが。どこへ』

『北條殿や狩野介殿。そのほか、久しく不沙汰してをる友をも、稀れには、訪はねば惡からうかと』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『ふゥむ。――馬の背の暦は』
『は』
『暦配りに行くならよせ』
『いや、年禮の年玉にもと、思ひまして』
『去年もだ。暦配りを名として、諸方の郷で、若者輩の集ひを催し、だいぶ、都へ聞えのよくない論議をしたといふではないか』
『はて。そんな事がいつ』
『とぼけては、いかぬよ、有綱。――ま、奥へ來い。正月だ、父とも飲まう。父とは、いやか』

父の酌で、息子が飲む。息子の酌で、父が飲む。時によつては、至上な人生味を醸し合ふかも知れない。だが、多くのばあひ、酒の意味をなさない事になるであらう。父はともかく、息子は、父をさかなには出來ないからだ。
『杯をあけぬか。どうだ、もう二、三献』
『充分です。はい』

『廳の吏生などは、有綱どのは、えらく大酒だと評してをるが』
『いや、父上ほどには』
『わし程にはか、あはゝゝゝ……。をとゝし、多々羅ノ牧などでは、大醉したな。稀れなほど、泥醉した。――そのかはり、醉ひの勢ひで、名馬をねだり取つた。あの木の下（馬名）は、以後、都では有名な馬になつてをる。大酒も醉ひ方次第では、さういふ得にもなるものだ』
『さもしい御酒をば……。そんな酒なら飲みたくもありません』
『なにがさもしい。名馬を家につなぐのは武家のたしなみ』
『賣れば、よい値で、賣れもしますし』
『親ごころを知らぬやつ。武門といへ、財がなくては』
仲綱は、子の顏いろに、あり〳〵と、親にたいする冷蔑と悲しみが滲み出たのを見て、さすが、あとのことばを、反らしてしまつた。
『――さうだ、そちにとつては、あの多々羅の後が、よくなかつたぞ。千葉殿の子息胤春や、深栖陵助などと共に、香取の奉射へ詣つた事も、忽ち、世上に聞えてをる』
『香取へは、詣りましたが』
『九郎御曹司などは、道づれではなかつたといふのか』

『存じまよぬ。もとより、何も』
『まあ、よい。あれは、あのときの事で、すんでをる。――然し、それは巷の風説のみと、六波羅殿のお疑ひを解くまでには、この父も、そちの祖父君（源四位頼政）も、どれほど、瘦せる思ひをなされたことか』
『父上たちは、さう迄、六波羅殿を、畏怖しなければならないのでせうか』
『なるまいとも。相國清盛殿こそ、わが家の恩人』
『でも、世間では、都の祖父君を、犬四位、乞食四位と、さげすんでをりますのに』
『世間』
仲綱は、きつとなつた。
『そちのいふ世間とは、世にすねて、日蔭者根性となつてをる源氏のわづかな徒黨をさして云ふのであらう。そんな仲間の闇交はりを、そちはまだやめてをらぬな』
『やめてをります。御折檻をうけてからは』
『いやいや、また暦など持ち出して、ことしの春も、若者集ひをするつもりで、無斷、出かけようとしたではないか』
『大勢が寄つて、親しく、一年の暦について、智恵を交はし合ふのは、惡い事とは思へませんが』

『そんな事は、府官や郷吏に、まかせておけ。――そちはの、有綱』

父の眼から、語氣と一つの壓迫を感じると、子の眼も、本能的な反撥をもつた。

『な、なんですか、父上』

『ばか者』

『ばかと仰つしやいましたな』

『云つた。たれが、汝らの青くさい謀み事など、氣づかずにをるか。伊東の伊東祐親どの、北條の北條時政どの、山木には六波羅殿の目代、山木判官兼隆どのがをられるぞ。伊豆の郷々、武門らしい武門で、平家人ならぬ家があるなら擧げてみい。その網の目の中で、雜魚ほどな輩が、何をやらうといふのか』

『侍として、いや人間としても、すゞやかに生きたいのです』

『そちの祖父頼政どのには、わけても相國淸盛どのの厚い御信任をうけ、伊豆には分國を賜はり、この仲綱もまた、長寛二年以來、伊豆守として、父子、國廳をも、お預かりしてをる身。その御恩をも忘れて、何の不足ぞ』

『そのお心が』

『なに』

『子には不足です。恥にたへられません。――犬四位の孫ぞと、人にさゝやかれるのは』
『云はしておけば』
仲綱は、腕をのばして、子の肩へつかみかゝつた。引き据ゑてと、男親の本能に燃やされたのである。だが、直垂の袖で、高坏や瓶子が仆れたにすぎなかつた。父よりも、はるかに敏捷な息子は、身を退くやいな、欄を跳んで、中の坪に立ち、わざと、太々しさを顔に作つて、父の姿を振り返つてゐた。
『アハヽヽヽ。跣足になつた。足の裏が、この味を知つては、もう禁足などに耐へられるものか。父上つ、御勘當を賜はりませ。勘當のはうが、よほどましだ』
『おのれ、子の口から』
仲綱は、廊まで出て來て、館中へとゞくやうな聲でどなつた。
『そこな痴れ者を、からめ捕れ。主人の子息と思ふな。六波羅殿のお爲にならぬやつ。ひつ捕へて、都へ差し立ててくれう。逃がすな』

鉈

火の國、伊豆の特長である。初春といふことばが、いかにも、ぴつたりする氣溫や空の色だつた。

巨大な寢牛が、眞向きに、わだつみの中へ俯つ伏してゐるやうな半島の背なか――日金山、丹那、韮山とつゞく尾根を――一群れの地侍が、氣だるさうに、歩いてゐた。

『どうして來なかつたのだらう、有綱は』

『うむ、あの有綱としたことがな』

『あいにく、この正月は、父の伊豆守どのが、在廳らしい。都の犬四位に劣らぬ六波羅の忠義者だ。番犬の守仲綱だ。出にくいのは、むりもないが』

『よせ、よせ。餘りな惡口は』

『有綱をいふわけではなし』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.